

ケアで関わる看護

Aさんは昨年まではゴルフをしていたほどのADLでした。A病棟に入院になる1ヶ月前に血液疾患の診断を受けました。Aさんは貧血と易感染状態で転倒、体動困難で入院しました。

入院時、カルテに記載してあった情報では、Aさんは化学療法をしており、今後もしていく方針であったため、日勤帯で情報収集をし、挨拶をする際に現在の化学療法の副作用はないか、体調はどうかを確認し挨拶をしました。Aさんと挨拶をした後、世間話しや今の心境についてなど、色々なことについて話しました。Aさんは家族をすごく大切にしており、家族がAさんにとってかけがえのないということ、Aさんは現在も仕事をしているとのことでした。そしてAさんは治療について前向きに頑張りたいとのことでした。

その日の午前中、Aさんのところへ主治医が、今後の事について病状説明をしに来棟しました。主治医はAさんに病名を宣告してから症状とADLの低下と、かなり進行が早いこと、現状では化学療法による副作用の出現で、体力が奪われる可能性もある事を説明しました。そして、化学療法をせず今後、対症療法をしていくのも選択肢であるという事を説明しました。Aさんは落ち着いた表情で主治医の言葉を復唱しながら「私は化学療法をしてもほんの少しの可能性しかないということ、したとしてもしないにしても症状の進行が早いため、あとどれくらい生きていけるかわからないということで間違いないですね？でしたら、私は残りの時間を家族と接する時間が欲しいです。ですから、化学療法もしないことにします」と、まっすぐ主治医の目を見て返答していました。私は自分の生死に関わる選択をしたAさんの覚悟を目の当たりにして、複雑な心境になりました。私の父も同じ病名を宣告されたばかりであったため、治療に前向きに捉えて頑張り、治療が出来る人がいる一方で、治療を諦めざるを得ない選択をする方もいます。そして、1時間前まで治療に前向きに捉えていた人が、緩和という選択をする事に、何とも言えない心境になりました。私はAさんにどんな言葉をかけて良いか、全く想像が付かず、思い浮かびませんでした。慰めの言葉でもない、励ましの言葉でもないと思いました。私がとっさに出た言葉は「Aさん、足湯しませか？」でした。Aさんは病状説明の前に、奥さんとあちこちに旅行に出かけて、足湯も温泉も行ったということ、今では身体が弱っていけないということをお話されていたので、その言葉が思い浮かびました。Aさんは「えっ足湯？可能ならしたいです」と返答が返ってきました。そしてAさんの足浴を実施しました。



足をお湯につけるとAさんは「温かい、昔を思い出すよ。足湯は体がぽかぽかしてきて温まる、こうやって妻とあちこち行ったんだ。懐かしいよ」Aさんは足浴が終わると急に涙を流し、「ありがとう。本当にありがとう。本当は辛いよ。でも僕は覚悟を決めました」とそう私に言いました。そして「今あなたに出会って本当に良かったです、今日のことは忘れません。頑張ります」といいました。

私はこのときAさんに声をかけるのではなく足浴という看護ケアを選択したこと、実施したことを後悔しませんでした。

Aさんは病名告知を受けてから数ヶ月後に亡くなりました。あの時足浴をして、奥さんに行った旅行を思い出して少しでも気分転換になり、前向きになったのであれば、あのとき足浴を選択して良かった

など今でも思います。今回の事例を通して思ったことは、毎日のスケジュールに沿ったケアをするのではなく、その日のその患者さんの希望に添った清潔ケアすることであると痛感しました。そして、忙し過ぎて、これができなかった、あれをしとけばよかったなど、日々の業務の中で後悔しない看護をしていく大切さを感じました。今後も患者さんの話を傾聴するだけでなく、自分で出来るケアを考え、ケアで寄り添い、各々患者さんに添ったケアを毎日後悔しない様に実施していきたいと思います。